

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 塚 田 縫 子

本研究は、近年著しく増加傾向を示している摂食障害の、各臨床形態の特性および各型の相互関連を明らかにするために食行動調査（以下EAT）と東大式エゴグラム第2版（TEG）によって健常対照群と摂食障害群および各摂食障害群間の比較検討を行ったものであり、以下の結果を得ている。

1. EATの項目のうち摂食障害群は健常対照群に比し、食事に対するこだわりと自己欺瞞の意識が共に有意に高く認められたことが示された。しかし神経性無食欲症既往後神経性過食症を発症した群（ANBN）とはじめから神経性過食症（BN）で発症した群間にはEAT値および各EAT項目の値に差は示されなかった。
2. EAT項目分析では神経性無食欲症（AN）の痩せ願望・肥満恐怖は健常対照群のそれと同程度であり、一方ANBNとBNは強い痩せ願望・肥満恐怖が認められたことが示された。
3. エゴグラムは健常対照群と摂食障害群では平均のプロフィールが全く異なっており、摂食障害群は、いずれも高いCPとAC尺度に挟まれた低いNPとFC尺度を特徴とすることが示された。またTEGのパターン分布では摂食障害群は優位型、台形型、N型、M型が非常に少なく低位型が多いことが示された。
4. エゴグラムプロフィールはANはW型、BNはU型を示したがANBNは両群の中間のW型に近いNP低位型のプロフィールを示し臨床像と一致していることが示された。
5. ANおよびANBNは、NPおよびFC尺度がBNに比しそれぞれ有意に低かったがANとANBN間では両尺度の差がないことが示された。
6. 摂食障害群におけるW型の割合の多さが示された。なかでもANは12人

中6人がW型を示し,AN群のエゴグラムパターンの偏りを示し,ANは性格が強化因子になっている摂食障害の一型と考えられた。

7. EATとTEGによりANを既往してBNを発症した群はANの心理的構造をもってBNの考えと行動をとる群であると考えられた。

以上本論文は食行動調査(EAT)とエゴグラム(TEG第2版)を同時に測定に用いて,ANとBNは相互排他的な臨床単位ではなく,ANを既往してBNを発症した群はANの心理的構造をもってBNの思考および行動をとるという形で重複する場合があることに示唆を与えるものである。以上により本研究は学位の授与に値するものと考えられる。